

わが国におけるアクロ体操成立の 基盤と将来の可能性

村 山 鉄次郎

はじめに

アクロ体操は、最近わが国でこれを競技として取り上げようとする動きが始まっており、既に今年の新体操の競技会で外国選手を招いてその運動競技の一端が披露されている。アクロ体操という語は、アクロバットを中心とした運動を、数種類の形式で勝敗を争おうとする競技を意味するが、東欧圏を主として中国、アメリカなどの諸国では既に競技として行われており、その競技形式も成立（個人：タンブリング、複数：男女各ペア、ミックスペア、女子トリオ、男子フォー）している。⁽¹⁾

偶然にも、このアクロ体操の解説書の一部を執筆することになったのに、確固たる資料の不足と筆者の不明のせいであまりにも困難な仕事であったことを告白せざるを得ない次第である。

しかしながら、この折に集めた資料も結構多いので、この際整理する意味で、解説書と重複する点も多いが、以下日本近代の体操との関係から記述を試みることにする。

(1) 上野陽一、池上正郷「アクロ体操」昭和61年

1. 概 観

アクロ体操は、わが国では、前述の諸国とは異なり、これまで独立した競技として行われたことはなかったが、以前から体操競技や団体徒手などの領域で部分的には競技されていたものである。タンブリングは戦前、戦後を通じて器械体操の個人種目または特殊種目、あるいは一般体操の個人種目として競技されていたし、複数で行うアクロ体操にしても、団体徒手のなかにその傾向を読み取ることができよう。従って、アクロ体操は、いわゆる『体操』とは切っても切れない関係にあるといわなければなるまい。それゆえ、以下、アクロ体操との関連からわが国の体操を概観してみる。あくまでも体操的なものを中心にして考察する意図から、複雑になり過ぎるのを避けるためもあって、遊戯や他のスポーツ、武道などについては敢て記述をしないことにする。

明治時代以前から、アクロバティックな技は、歌舞伎の殺陣でみられるトンボ返り、越後獅子の芸、サーカスの曲芸など、芸能の分野では古くから行われており、明治以後もずっと続くことになるが、これらはあくまでもそれぞれの領域にとどまり世に出てスポーツとして発展することはなかった。

明治維新後、文明開化の風潮によって欧米から続々と入ってきた各種のスポーツが、対校競技を中心に発展をみたように、体操競技（この当時は器械体操と呼んだので以下この名称を用いる）も学生間の競技から始まった。

明治5年に学制が公布されていらい、近代的学校制度が徐々に整備されるにつれて、学校教育の中に他教科と並んで体操が取り入れられることになった。しかし、この当時、体操を教えるにも指導者も施設も皆無に等しい状態で、適切な指導書もなく、至極初歩的な徒手体操⁽¹⁾や兵式体操⁽²⁾が示されはしたが徹底する筈もなかったであろう。そこで政府は、明治11年（1878）体操伝習所を設立し、そこへアメリカからリーランド（1850—1924）を招いて、彼に指導者の養成を依頼した。この体操伝習所で通訳をしていた坪井玄道が中心となって明治15年（1882）、リーランドの体操を「新撰体操書」として著わしたが、その体操はダイオ・ルイス（米、1823～1886）の体操（徒手・手具体操）とドイ

ツ系の体操（器械体操）の取り合わせと考えられる。これと時を同じくして伝習所から「新制体操法」が出されたが、これも前書を基礎として欧米の体操書を参考にして作られたものである。この両書を合わせたような所謂『普通體操』が以後しばらくの間は学校体操の指導に大きな役割を担うことになる。リーランドは軽体操（徒手体操と軽手具体操＝玉竿、棒、棍棒、木環、豆囊、啞鈴などを用いる体操）を中心に置き、重体操（器械体操はこれにはいる）を競技者や体育指導者や運動家や筋力の鍛練を必要とする者には練習すべきだと認めながらも、学問をする者に対してはあえてこれを推奨しようとしなかった。それと共に「新制体操書」も医療体操的色彩又の濃いものであったから保健的色合いが非常に強かったといえる⁽³⁾。けれども、こと学校体操の発展に関しては大いに貢献したことを忘れてはなるまい。

これらは前述のように一般には『普通體操』と呼ばれ、明治19年（1886）、時の文部大臣森有礼による学校令以後、学校体育に加えられた兵式体操（特に中等学校以上に多く）とともに学校体操の主流として明治末期まで続けられるが、アクロバットの巧技とはかけ離れたものであったと考えられる。

ところで、軍隊においては、はやくも明治4年（1871）廃藩置県の際に近衛鎮台兵を召集して兵営に鉄棒、棚、手摺、木馬等の体操器具を設置している。同7年（1874）には陸軍戸山学校にフランス陸軍軍曹デュクロ（Ducros）を招

(1) 今村嘉雄「日本体育史」昭和45年、310頁

小学教則に『毎級ニ体操ヲ置キ……樹中体操法図、東京師範学校板体操図ナドノ書ニヨリテナスベシ』とありいずれも初歩的な徒手体操である

(2) 前掲書316～7頁に述べられているように、

明治7年に文部省が出した小中学校、尋常師範学校用教科書である「体操書」の運動は、秩序運動や若干の器械運動や遊戯などが内容であるが、軍隊における体操と酷似しているので『兵式体操』とした。

(3) リーランド及び体操伝習所に関しては今村嘉雄著「前掲書」、「十九世紀に於ける日本体育の研究」、「リーランド博士」並びに真行寺朗生、吉原藤助共著「近代日本体育史」有明書房、昭和59年、を参考とした。

いて体操術の訓練をしたので、陸軍の体操は著しく進歩したといわれる⁽¹⁾。けれども、軍におけるこれらの兵式体操は、本来の目的が兵士の訓練にあったので、軍隊においては当然スポーツとしての体操への道を辿ることはなかった。しかし、ここで器械体操に熟達したものが、外部で指導して器械体操発展に寄与したことは否めない。

他方、教育界にあっては、慶応義塾が三田に移転した明治4年(1871)、校庭にブランコ、シーソー、鉄棒などの体操器具を設置している⁽²⁾。慶応義塾百年史には、福沢諭吉が沢山の運動器具を設置したり専門家を雇っていろいろな運動を教えさせた⁽³⁾ことが記されている。また、のちの体育協会会長(初代の体操連盟会長その他歴任)平沼亮三は、明治22(1889)年に幼稚舎に入舎早々さまざまな運動用具が整っていたので、相撲をやり、鉄棒、球ぶっつけ、輪廻しなどのほか、木に登って木から木へ渡り歩くなどいろいろと何でもやった……⁽⁴⁾と「スポーツ生活六十年」に書き残している。いずれにしても、構内は創立者のスポーツ重視の意向によって運動施設に恵まれていた。

このように、慶応義塾では早くから器械体操をやっていたようである⁽⁵⁾が、ついに明治35年(1902)器械体操部が、日本で最初に創立をみたことは人の知るところである。やがて明治37年(1904)秋に、第1回校内大会が紅白試合の形式で開かれ、ここに成城中学、早稲田中学、郁文館中学、日本体育会、青

(1) 高島平三郎「体育原理」明治37年、350～351頁

(2) 慶応義塾「慶応義塾百年史 年表」昭和35年、238頁

(3) 慶応義塾「慶応義塾百年史 中(前)」昭和35年、168頁

(4) 平沼亮三「スポーツ生活六十年」昭和24年、11～12頁

(5) 慶応義塾「慶応義塾百年史 中(前)」昭和35年、168頁

『明治10年ごろになると、馬術、器械体操などは一時衰え……』

同書、169頁の「明治25年5月に『慶応義塾体育会』を組織し、会長には社頭の福沢捨次郎を推し、剣術、柔術、野球、端艇、体操各部を体育会の下に集合統一し、……」の体操部は操練(兵式体操)の部であったと思われる。〔慶応義塾幼稚舎史の186頁にある「明治12年に入舎した岩村透は……訓練ゴッコをした……軍人上がりの川崎寿太郎が体操教師として迎えられるようになると、訓練熱は急に燃えたった」及び訓練内容の記述により〕

山師範等の選手が集まった。他校との競技会は明治39年(1906)青山師範との連合競技会が最初で、これに順次麻布中学と成城中学が加わって明治43年(1910)第1回四校聯(連)合競技会が催されたのである⁽¹⁾。

学生スポーツとしての器械体操が着々と発展をみる一方で、明治30年代の半ばまで学校体操の主軸とされてきた普通体操が、アメリカから帰国した川瀬元九郎や井口あぐりらによって紹介されたスウェーデン系の体操に押され⁽²⁾、大正時代の学校体操はスウェーデン体操を主とするヨーロッパ系の体操と兵式教練⁽³⁾という形で進められた。この間の事情について「日本スポーツ百年」に詳しく述べられているので引用する。

「……リーランドの体操が形式の伝授や反覆に過ぎなく、発展性を欠いていたので次第に厭きを生じてきた。その上、文部省の兵式訓練の奨励と共に、兵式体操の流入が烈しく、はしなくも、陸軍、文部の間に、学校体操をめぐっての論争が起こった。更にまた、坪井玄道が33年から35年にかけて体操研究のため欧米に留学し、川瀬元九郎は33年ボストン師範学校に学び、36年には井口あぐりが同じく同校を卒えて帰朝して、スウェーデン体操を伝え、行進遊戯などを紹介したので、学校体操は、これらの帰朝者の説と陸軍の体操と兵式訓練と従来の普通体操と入れ混りその就くところを知らず混乱に陥った。このように、従来の普通体操と兵式体操とにスウェーデン体操が流入したので、文部省では1904年明治37年12月体操遊戯調査会を設け、柳沢政太郎、三島通良、井口あぐり、坪井玄道、川瀬元九郎など当代の教育家、体育家を委員として、学校体操のあるべき姿の調査を命じたのである。委員会は研究の結果、翌年11月スウェーデン体操を適当と認め、兵式体操を兵式教練と改めることの妥当なことを答申したので、40年陸、文両省の共同調査会を設け、両省の調整を図ることとなっ

(1) 慶応義塾体育会器械体操部「器械体操部五十年誌」昭和27年、45～47頁

(2) 水野忠文ほか「体育史概説」昭和41年、259頁

〔スウェーデン体操と普通体操の抗争〕に詳しく述べられているが、川瀬の生理解剖学的理論を背景とする科学性によって現場指導者の関心を集めたスウェーデン式体操は大正時代の大勢を占めることになる。

(3) 岸野雄三「体育史講義」昭和60年、93頁

た。文部省では一層学校体操の本質を研究調査する必要を認め、当時、体操に熱心でその成績が顕著であった兵庫県立姫路中学校長の永井道明(1868～1950)を選んで欧米留学を命じた。永井はボストンで一カ年の研究を卒え、欧州に渡り、スウェーデン、デンマーク、ドイツ等各国の体育状況を視察、3年の研究を終えて42年2月帰朝した。留学中、東京高等師範学校教授に任ぜられ、同校で専ら体操の研究と指導に当たったが、彼の意見は重く用いられ、陸文共同調査会もスウェーデン体操の適切なことを認め、学校体操はスウェーデン体操を採用することとなり、遂に大正2年1月28日の学校体操授業要目の制定となったのである。」⁽¹⁾

しかし、このスウェーデン体操は、堅苦しく、画一的な形式主義であったために、思うような成果を挙げ得ず批判的となった代物である。

このような事情で大正2年(1913)以後は、スウェーデン体操を採用してはみたものの、北欧においてもそうであったようにわが国においてもやはり、この体操がリングの目指した理想とは程遠く単なる形式主義に陥ってしまった。ここに新しい傾向の欧州系特にドイツ系の体操が持ち込まれるに及び、大正2年に出された学校体操授業要目による体操は遂に再考を迫られるはめになった。この時代にはスポーツ競技がますます隆盛を来し、人々を引きつけて行ったのに、スウェーデン体操は、命令的で、途切れ途切れの硬直した運動⁽²⁾で興味に乏しいものだったから尚更である。

そこで大正15年(1926)にこの要目が改正されることになった。改正された要目の器械体操の分野では、いわゆる技らしい技が登場してくる。特に画期的なことは、床での倒立、マットの前方・後方の回転、側方倒立回転などが採り入れられていることである。以後のマット運動が盛んになる大きな要因を作ったものである⁽³⁾。

(1) 日本体育協会「日本スポーツ百年」昭和45年、363～4頁

(2) 藤村トヨ「藤村トヨ関係資料」東京女子体育大学紀要第2号、昭和42年、158～9頁

(3) 佐藤友久「日本体操実技史の研究」昭和46年、417～419頁

昭和3年(1928)にはラジオ体操が登場する。運動が簡易であり、従来の体操に比べて程よくリズムもあり連続して行うように出来ていた⁽¹⁾ので、全国に徒手体操を普及するという意味においては大きな役割を果たした。

さて、競技としての器械体操は、この間に着々と発展をみせて昭和5年(1930)4月には遂に全日本体操連盟が設立された。この年の5月に開催された第9回極東選手権大会では、競技種目にはなかったが、器械体操の公開演技ならびに合同体操を行ったのである。11月には第1回体操祭を行ったが、大雨にたたられて所期の目的が達せられなかった。この体操では、上野公園に都下の学生約1万人を集め、宮城前、日比谷公園へ大行進をした後、大々的に体操を発表しようというものだった⁽²⁾。

翌昭和6年(1931)はニールス・ブックが来日してわが国体操界に波紋を投じた年である。ニールス・ブックの体操は、力強く弾力的だったから、スウェーデン体操の影響から完全に抜け切れない状態のわが国では非常に新鮮なものに見えたらしい。特にマット運動はこの体操に批判的な人々にも受け入れられ、その後のマット運動が盛んになる要因を作ったのである。

これに続く昭和7年(1932)は、わが国体操選手団が第10回ロサンゼルス・オリンピック大会に初参加した記念すべき年であったが、偶然とでもいうか、このオリンピック大会では、個人種目としてタンブリングが行われ、アメリカ選手が上位を独占した。団体競技の徒手において、日本選手が思うような得点を得られなかったのは、アクロバティックな技を欠いた徒手体操中心の演技のせいであった⁽³⁾。

当然、タンブリングの強化が必要となり、翌昭和8年の大学高専大会からはタンブリングが、マット、マットワークなどの名称で個人選手権の種目に取り上げられるようになった。同年7月には第1回女子体操遊戯講習会が開催さ

(1) 同書、123頁

(2) 大日本体育協会「全日本体操連盟史……大日本体育協会史」昭和38年、1210頁

(3) 全日本体操連盟「第10回ロサンゼルスオリンピック大会報告書」昭和8年

れ、ここで女子の体操や体育ダンスの講習が行われた⁽¹⁾。筆者はこの当時の体育ダンスは戦後の新体操移行時の団体徒手体操の系統と理解している。

この後、第12回東京オリンピック大会返上を決定した昭和13年（1938）にむかって、器械体操、集団体操はより盛大に行われるようになって行った。しかし、この頃から学生スポーツに対する政府の関与が強まり⁽²⁾、返上したオリンピック競技会の代わりに、紀元2600年記念東亜競技大会（フィリピン、中国、満洲国、ハワイから参加）を盛大に挙行了た⁽³⁾ものの、やがて、太平洋戦争への突入により、スポーツ競技は衰退の一途を辿り昭和17年で競技は跡絶えてしまった。この戦争の激化によって体操界もまた多くの有為な人材を失ってしまった。

戦後間もなく、日本体操協会（戦前の全日本体操連盟を改め）が再建され昭和21年、第1回国民体育大会から参加したが、個人競技にとどまった。

競技の態勢が本格的に整うのは昭和24年（1949）である。この年、第4回国民体育大会には高校一般体操の部として男女団体徒手が設けられ、以来ずっと今日に至っている。この年の2月27日には復活第1回全日本器械体操種目別選手権大会、同年10月の全日本選手権大会が開かれ、体操界は活気を呈するようになり始める。

翌昭和25年（1950）は、わが国の体操競技が国際舞台へ飛躍する契機となった日米対抗が行われた年である。また、タンブリングもこの大会を機に発展することになったのである。

以下、アクロ体操に関係の深いものについて、個別にみてみよう。

2. 体操人と逆立ち

ところで、倒立といえ、今日でも体操競技において最も基本的な技のひとつ

(1) 大日本体育協会「全日本体操連盟史……大日本体育協会史」昭和38年、1122頁

(2) 前掲「大日本体育協会史」補遺、15頁（学校教育に直接関係する運動は文部省の管轄に残されたが、それ以外は新設の厚生省に移管された）

(3) 日本体育協会「日本スポーツ百年」昭和45年、24頁

つであるし、アクロ体操においても重要な基本技であるが、わが国の器械体操の歴史のなかでもこの倒立（逆立ち）は重要な位置を占めている。全日本体操連盟史をひもどくと、明治43年（1910）6月5日に開かれた、四校連合競技会（慶応義塾、青山師範、麻布中学、成城中学の選手を混合して紅白に分けて競技した）の記録が載っている。この競技会後に行われた都下優秀選手の競技で、慶応 天羽選手の「自然倒立」、同 白石選手の「倒立脚抜き返す倒立」（跳越台上）、麻布 小島選手の「倒立側面下」（棚）の妙技が観衆を啞然とさせたとある⁽¹⁾。

また、大正12年（1923）6月9日、10日に神田YMCAで開かれた第1回器械体操選手権大会（参加校：慶応大学、早稲田大学、日本体育会体操学校、麻布中学、荏原中学等）では、倒立競争が行われた。麻布 大庭選手が、時間競争では2分4秒8で、距離競争では46米でそれぞれ優勝している。⁽¹⁾倒立競争はその後もしばらく続けて競技されたが、当時はこのほかにスピード競争も行われていた。⁽²⁾

大正13年（1924）当時に学生器械体操連盟（大正12年＝1923 設立）が作った採点規則がある。それによれば、自由競技、応用競技、採点競技の三つがあり、応用競技は 1)鉄棒弾道幅跳 2)鉄棒弾道高跳 3)鉄棒振幅跳 4)鉄棒懸垂回数競争 5)横木跳（高跳）6)跳越台幅跳 7)棒幅跳 8)倒立時間競争 9)倒立距離競争 10)倒立15米競争 この他5種競技があった⁽³⁾。

そもそも、慶応義塾器械体操部創立当時の師範津崎亥九生は大変な体操の名人であった。明治24年から29年にかけて器械体操競進会や運動競技会の器械体操の部で第一等賞を毎年のようにとっているが、彼が後年東京高師の教官になって間もなく御茶の水橋の欄干の上で倒立して道ゆく人々の肝を冷やしたことや倒立して教室の階段を上下したことなど逸話の多い人⁽⁴⁾であった。また、体

(1) 大日本体育会「全日本体操連盟史一大日本体育協会史」昭和38年、1203頁

(2) 同上 1205頁

(3) 栗屋登「学生器械体操の甦生期一体育と競技 3巻9号」大正13年、83頁

(4) 今村嘉雄「学校体育に寄与した人々(一)一学校体育 2巻7号昭和24年

操協会の近藤天現会長が早大器械体操部の監督当時、部員十数人とともに銀座の交差点を逆立ちしながら一斉に渡った話⁽¹⁾や現存する写真で見れば絶壁の上で逆立ちして女子学生を驚かせた佐々野利彦現体操協合理事やバスケットのボード上で倒立している三宅邦夫前中京大教授（故人）大鉄橋のトラス頂上で逆立ちする桑原生男（昭7全日本高等部2位）等々……逆立ちにまつわる体操人の武勇伝は戦前戦後を通じて枚挙にいとまがない。

3. タンプリング

わが国のタンプリングの発展に関しては、ニールス・ブックの影響を無視しては語れないであろう。

明治末期から大正一昭和初期にわたって体操研究が盛んになり、視察や留学を通して欧米の実情が伝えられるようになったが、これらの情報の多くは、わが国の学校体操の行き方に対して好意的ではなかった。このような状況下で、玉川学園、成城学園、三橋喜久雄らによって、当時欧米各国で話題となっていたニールス・ブックを招こうという動きが始まった⁽²⁾。昭和3年（1928）ブックに訪日を要請したが、曲折があつてすぐには実現せず、その3年後に漸く彼を迎えることができた。⁽³⁾

昭和6年9月にニールス・ブック一行が来日した時に、彼の基本体操の一部

(1) 「体操日本栄光の物語」（小野泰男）12, 14頁, 14～5頁

(2) 森下孝「三橋喜久雄の体操観とわが国の学校体操に及ぼしたその影響（その1）一慶応義塾大学体育研究所紀要 第24巻 第1号」昭和59年, 23頁

(3) 森下孝「前掲書」23～4頁にこの間の事情を次のように述べられている。

〔ニールス・ブックの招聘について中心となったのは三橋と成城、玉川学園の小原国芳である。……小原の要請もあり、三橋は早速ニールス・ブックに招聘状を送り、それに対する返書として昭和3年の9月か10月に一行11名で訪問するとの快諾を得ているが、残念ながら文部省当局はこれを阻止し、3年後の昭和6年9月阻止しきれなくなってようやく一行の訪日が実現した……この当時、改正要目制定直後でもあり、文部省は改正要目の普及定着を全国的に推進していた矢先に、要目体操から外れる革新的ニールス・ブックの体操を阻止し、できるだけ延期する策に出たのではなかろうか。〕

としてマット運動が演じられたのが、わが国でタンブリングらしいタンブリングが人々の注目を浴びた最初であろう。彼は日本の徒手体操などにも大きな影響を与えているので、ここで彼の体操の性格を述べてみたい。

ニールス・ブックは、体操教師養成の普通課程を終えた後、コペンハーゲンの「国立体操研究所」で教育を受けたが、実習はリングの創案になるスウェーデン体操であった。彼がこのスウェーデン体操に対してどのように感じていたかを、橋本道著「基本体操」の序論（玉川学園の小原国芳が昭和3年にニールス・ブックを招聘した時、学園にデンマーク体操東洋分校の設置の承認とOD章の承認とともに寄せたブック自身のデンマーク体操の成立事情に関する小論）から引用してみよう。

「1915年頃に至って、はじめて私は、所謂合理的体操組織に於いて熱心に教育を受けた25年の間に、少年時代に始めた時よりも、はるかに自分の態度動作がギゴチなく不十分になったという事実を知った。……中略……

然るに人々は、秋に体操講習所へやって来た時と同じような固苦しさ、窮屈さのままで、春になるとその講習所を出て行った。」⁽¹⁾

このように、スウェーデン体操を、不自然で堅苦しく実効の上がらないものと考えたブックは、このスウェーデン体操を再編成し彼独自の合理的体操を作り上げた。いわゆるニールス・ブックのデンマーク体操である。この体操は、徒手体操、肋木運動、二人組運動、整美体操、跳躍転回運動からなっている。彼が習ったスウェーデン体操の弊害から免れるために、リズムと調和、柔軟性、弾性、巧緻性を重要視し、運動の途切れがないように連続的に行うのがデンマーク体操の特徴である。

この頃、わが国でもすでにスウェーデン体操は批判され新しい傾向のドイツ系体操を取り入れていたが、このデンマーク体操には、大部分の関係者は驚かされた。特にタンブリングに対しては、当時批判的で冷静にみていたものでも、一様に高く評価している。

(1) 橋本道「ニールス・ブック基本体操」昭和34年、10頁

「日本体操栄光の物語」(小野泰男編著, 日本体操協会監修)に, この時の様子が載っているので引用してみよう。

「秋にはデンマークからニールスブックらの一行が来日してデンマーク体操が紹介された。このときタンブリングを演じた一行があまりにも強烈な宙返りの連続を見せるので, 日本の体操関係者はびっくり仰天した。今では連続宙返りは多くの選手がやることで, 少しも珍しくはない。しかし, 当時の日本ではそのような演技をする選手はいなかった。だから一般観客と一緒にあって, オリンピック出場をめざす当時の一流選手たちも, 今まで見たこともない妙技に舌を巻いたものだった。」⁽¹⁾

ただ, 中には当時のアメリカのタンブリングを実際に目にしたことのあるものもいて, タンブリングについては, アメリカの方がはるかにレベルが高いと評している。⁽²⁾

昭和7年(1932)のロサンゼルス・オリンピック大会を機に, 翌年から, 全国大学高専器械体操選手権大会で, 個人競技として「マット」が登場している。大会の競技種目は, 対抗競技は平行棒, 吊環, 鞍馬, 鉄棒, 跳箱の5種目, 個人競技はこの5種目に加えて徒手, 棍棒, 吊縄(クライミングロープ), マットの計9種目であった。マットの優勝者はこの時代のエース近藤天選手(早大)である。徒手, 棍棒, マットは国内の競技では新種目としてこの大会に初登場したのである。

これ以後, 戦前はマットもしくはマットワークの名称で競技が続けられる

-
- (1) 小野泰男「日本体操の栄光物語」昭和47年, 15頁

(文中, 連続宙返りの表現が見られるが, 疑問である。当時のデンマーク体操の演技者の技量では可能性はあるが, 困難と思われるからである。それにタンブリングはデンマーク体操を構成している一部分に過ぎないということも疑問視したくなる一因である。)

- (2) 竹内一「ニルス・ブックに対する印象―体育と競技 10巻11号」昭和6年, 67頁「丁抹の連中は, 誰も彼もが, あんなに上手にやるんだらうか? 最後のマットワークなど素晴らしい人気だった。大受けた。而し, 彼のシステムの本質はあのマットワークにはあるまい。マットワークだと考へれば, アメリカのジムの連中は, あの位のものではない。それこそ魂を抜かされて失ふのだ。」

が、タンブリングという呼びかたが競技会で用いられるのは戦後になってからである。

戦後、体操人たちはいちはやく日本体操協会（全日本体操連盟を改称）を再建し、昭和21年（1946）の第1回国民体育大会に参加した。この大会では全日本体操競技選手権大会を兼ねて個人競技だけが争われたにとどまったけれども、すぐ次の年には団体戦も加えて競技できるようになった。

昭和24年（1949）2月、復活第1回全日本器械体操種目別選手権大会という長い名称の競技会が東京九段中学（旧制）で開かれ、棍棒、マット、綱上り（クライミングロープ）の選手権が争われたが、同年10月の全日本体操選手権大会においても、特殊種目として上記3種目が行われている。前者の優勝者は竹本正男選手（日体大OB）後者の優勝者は上迫忠夫選手（島根体連）である。

翌昭和25年（1950）はタンブリングにとって再び飛躍をみるきっかけを作ることになる。ムーア選手団長以下、全米1位、2位、3位にランクされたロツツハイム、コチス、スクロビーの3選手を迎えた日米対抗といわれる交歓競技会である。競技の成績とは別に、アメリカ選手のタンブリングは、日本選手が不得意とする鞍馬とともに、明らかにわが国体操関係者の注目の的となった。その頃のアメリカの体操選手は、概して種目別のエキスパートが多く、オールラウンド選手は各種目におけるトップレベルにはなかった。それにしても、コチス選手らのタンブリングは、スピート感にあふれる速後転跳び、速後方宙返り等の連続技、ひねり技などダイナミックなものであった⁽¹⁾。これによって日本の体操関係者にタンブリングの何たるかを植え付けたのであった。この競技会は、戦争によって第11回ベルリン・オリンピック大会（1936）以来、長らく国際舞台から遠ざかっていて、世界体操界の情報に乏しかったわが国の体操関係者に世界のレベルの見通しを与えたのみならず、ムーア団長の助力を介して

（1） 浜田靖一「マットワークと組体操」昭和27年および高木武夫「米日体操競技会を観て一新体育20—7」昭和25年、61～64頁

国際競技会に復帰する足掛かりとなった重要な競技会でもあった。戦後、長いブランクのあとにもかかわらず日本選手が第15回ヘルシンキ・オリンピック大会で好成績を残し得たのも、その後の飛躍をみたのも、この競技会に負うところが大きい。

その後、一躍タンブリングは、スピードと変化とスケールの大きさを追及することになる。上迫選手（当時スワロークラブ）はこの頃のタンブリング（25年からはこの呼び方が定着した）の王者であった。23年の全日本、24年の国体、25年の国体、26年の全日本選手権などの特殊種目の部においてチャンピオンになっている。26年の国体では小野喬選手（教育大）が優勝し、27年の全日本でチャンピオンの座についている。

このようにみると、この時期は、超一流の国際選手が、タンブリングにおいても王座についていたことがわかる。しかし、体操競技が国際競技を目指すようになると、一流選手は、徒手（床）、鞍馬、吊輪、跳馬、平行棒、鉄棒の正規競技種目に重点を置くようになり、タンブリングなどの特殊種目から遠ざかるようになった。このあと、28、29、30年の全日本学生選手権大会、29、31、33年の全日本選手権大会の特殊種目タンブリングにおいて優勝した森谷（現村山、明大）は、実は筆者である。

この頃のタンブリングは、徒手の採点規則を適用して採点していた。マットの長さはロングマット2枚に、両端にショートマット1枚ずつ足していたので、18米でやるのが正規であったが、大会によってはマットが足りずショートマットが1枚足りない（15米）ことも、ロングマット2枚だけ（12米）のこともあった。従って採点規則も時によりけりで、マットが短いときにはマットの幅に延長線を引いて、地床のうえで演技してもよかった。マットからはみ出せば徒手と同じ減点、完全に出てしまえば演技終了とみなされた。しかし、完全に出た場合の取り扱いはやがて器械での落下（当時は1.0の減点）と同様にみなされるようになった。

出場する選手は皆、器械6種目の規定、自由（この頃は、1日目規定、2日目自由）の団体戦を終わったばかりで、疲労のためかマット外に飛び出すこと

も珍しくはなかった。演技は時間制で1分～1分30秒、その間何回往復してもよかったが、体力的に3～4回演技するのが精一杯だった。

演技内容は、例えば、ロンダード一速後転とび連続一後方伸身宙返り……前転とび連続一前方宙返り……前方宙返り一ロンダード一後方伸身宙返りひねり（片足）一ロンダード一速後転とび一後方伸身宙返り1回ひねり……といったものだった。ようやく、タンブリングのスピード化時代に入った。

32年にも優勝した川俣吉男選手（明大）が、34年には後方伸身宙返り2回ひねりを使って全日本選手権大会で優勝している。

そのあと、大島選手、（中京大）が、両足前転とび連続の高速化に成功し、そのスピードを利用して前方伸身宙返りを成功させ、後方2回宙返りも織り込んで圧倒的勝利をおさめた。

この頃はすでに、タンブリングには団体徒手（一般体操）の選手が進出し、やがて、体操競技の領域からタンブリングが姿を消して一般体操の部で競技されるようになり、一段と技の開発が進められた。43年団体徒手が新体操と名称を変えてのちもここで競技されていたが、54年（1979）を最後に新体操でもこのところ競技されていない。

4. 団体徒手体操（集団体操・組立体操）

男子の団体徒手はわが国独自のものであるが、その元は集団体操である。体操は欧米から移入された時から、集団で行うように作られていたのであるが、見せる体操としての集団体操は様々なかたちで推移してきたようである。明治20年（1887）慶応幼稚舎の運動会で旗体操をやり、満場の喝采を浴びたといわれるが、これが集団体操のはしりといえよう⁽¹⁾。

集団体操の発展には昭和3年（1928）から始まったラジオ体操もひと役買っ

タンブリングの項については戦後の一連の記録は散逸しているため、正確を期すことが困難であったが、体操協会の資料のほかに、主として朝日新聞社「運動年鑑」、「体育と競技」の資料を参考にした。

(1) 慶応義塾「稿本 慶応義塾幼稚舎史」昭和40年、548頁

ている。体育指導者たちはもともと社会に体操を普及させる必要性を痛感していた。そこでラジオ体操が大衆にアピールしたのを機に昭和5年（1930）第1回体操祭を計画した。前述したように、大雨にたたられて行進のみで肝心の体操を発表する機会がなかったが、第2回以降は盛大に挙行されて数多くの団体が集団体操を行っている⁽¹⁾。この体操祭は、ドイツの体操祭やチェコスロバキアのソコール祭⁽²⁾にならったもので、ここで各団体が工夫をこらして研究した成果を発表するのである。優秀な団体は表彰を受けることになっていた。集団体操をわが国ではマスゲームというが、マスゲームや組立体操はこの体操祭においてより一層の発展をみたのである⁽³⁾。

組立体操については、大正の中期に神田のYMCAで初歩的なものが行われ、その後慶応大学、日本体育会体操学校（日本体育大学の前身）その他で研究され体操祭や運動会で発表されていた⁽⁴⁾。

この体操祭のほかに、朝日新聞が昭和10年（1935）に始めた体操大会がある。第1回大会は甲子園球場での大マスゲーム大会であった。その後昭和17年（1942）まで盛大に行われたが、太平洋戦争突入によりこの第8回大会をもって幕を閉じなければならなかった⁽⁵⁾。

さて、いよいよ集団体操は競技の道を歩むことになる。昭和14年の体操競技規定をみると、次のようになっている。

(1) 日本体育協会「日本スポーツ百年」昭和45年、367、368頁

(2) ソコール祭については、当時世界的に評価が高く、わが国においても大きな関心が寄せられていた。岩野次郎、村山正明、広井家太らによって昭和7～9年頃にかけて専門誌「体育と競技」の中で詳しい紹介がなされている。独立運動の基盤にしようとした点、ドイツより遙かに大規模で整然としたものではあるが、体操（マスゲーム）を観衆にみせる体操祭である点など、もともとドイツの体操祭に範をとったといわれるようにそれに酷似した性質のものである。

(3) 全日本体操連盟「体操祭とは何か——体育と競技」13巻11号、昭和9年、97～98頁

(4) 浜田靖一「組立て運動」昭和61年、12頁

(5) 日本体育協会「日本スポーツ百年」368頁（この体操大会はチェコのソコール祭をほうふつさせるものであったという）

第1章 競技内容

第1条 体操競技は左の種類とす

1項 器械体操 鉄棒, 平行棒, 吊環, 鞍馬, 跳箱, 跳馬, バック, 跳躍板, 吊縄等の運動

2項 器具体操 棍棒, 巫鈴, 棒等の運動

3項 徒手体操 一般徒手, 組塔, 倒転等の運動 (何れもマット使用可)

昭和16年(1941)神宮大会には, 男女一般団体競技が行われ, 男子は大連体操ク, 女子は藤村女子体研会が優勝している。また, 男女産業従業員集団競技においては, 男子は宇野沢組鉄工, 女子は日清紡浜松が優勝している。これも他の競技と同じく翌昭和17年(1942)までの寿命であった。

この時代の資料は殊に散逸していて, 実情が不明瞭であるので, 参考として「体操」に掲載された集団体操の成績と参加要項を載せることにする。

○全日本体操連盟「体操」昭和15年 10巻12号 P53~54

『第11回明治神宮国民体育大会多体操技成績』 (〔審判員〕P55)

女子中等学校対抗競技 (昭和15年10月28日 於国民体育館) 伊沢, 桜井, 石川, 光石

順位	学校名	所属府県	徒手体操	行進遊戯	合計点
1位	東洋高女	東京	27.0	27.5	54.5
2	野田高女	兵庫	26.5	26.5	53.0
3	松江市立家政	島根	26.0	26.5	52.5
4	奈良女高師付女	奈良	26.0	26.0	52.0
5	札幌高女	北海道	26.5	25.0	51.5

男子中等学校府県対抗団体並個人競技 (昭和15年10月29日 於日比谷公園大草地)

徒手, 鉄棒, 跳箱 詳細略

一般男子個人競技 (昭和15年10月27, 28日 於国民体育館)

徒手, 鞍馬, 平行棒, 鉄棒, 吊環, 跳馬 詳細略

男子教員府県対抗競技（10月31，11月2日 於国民体育館）

徒手，鉄棒，跳躍 合計

女子実業団体競技（10月27日 於国民体育館）

順位	団体名	所属府県	行進遊戯	徒手体操	合計点
1位	栗原紡織合名会社	東京	28.0	29.0	57.0
2	満鉄本社	関東州	28.0	27.0	55.0
3	大東紡織亀戸工場A	東京	26.0	27.0	53.0
4	松直工場	東京	26.0	26.5	52.5
5	大東紡織亀戸工場B	東京	24.5	27.0	51.5

一般女子個人競技（昭和15年10月28日，31日 於国民体育館）

鉄棒，平均台（規定，自由），平行棒（規定，自由），跳箱（規定，自由）

「体操の夕」の体操競演（昭和15年11月2日 於明治神宮外苑水泳場）

甲，実業団体（大日本国民体操と選択種目）

イ，男子の部

順位	団体名	所属府県	規定	選択	合計
1位	日東紡績株式会社	福島	62.5	62.5	125.0
2	宇野沢組鉄工所	東京	63.0	61.5	124.5
3	中島電機株式会社	東京	56.5	60.0	116.5

ロ，女子の部

1位	栗原紡織合名会社	東京	53.0	54.0	107.0
2	大東紡織亀戸工場	東京	50.0	52.0	102.0
3	日立製作所日立病院	茨城	51.0	49.5	100.5

ハ，男女混合の部

1位	藤倉工場	埼玉	45.0	45.5	90.5
----	------	----	------	------	------

乙，体育指導者及び専門学校生徒団体（大日本青年体操と選択種目）

イ，男子の部

1位	日本体育会体操学校第二組	東京	62.0	62.0	124.0
2	同校 第一組	同	65.0	58.0	123.0

3	埼玉県体育指導者団	埼玉	61.5	61.5	123.0
	ロ，女子の部				
1 位	埼玉県体育指導者団	埼玉	52.0	53.5	105.5

○大日本体育会「体育日本」19巻9号（昭和16年9月号）

明治神宮競技大会参加要項

体操競技部

一、演練種別

- 1 一般男子個人競技（全日本体操連盟第12回全日本体操選手権）
- 2 一般女子個人競技（全日本体操連盟第5回全日本体操選手権）
- 3 教員府県対抗競技
- 4 男子中等学校府県対抗競技（全日本体操連盟第11回全日本体操選手権）
- 5 男子中等学校個人競技（全日本体操連盟第11回全日本中等学校体操選手権）
- 6 集団体操競技（各府県は各種別に数団体を出場せしむることを得）

（一）男子産業従業員団体

- 1）種目 別記要項にあり
- 2）参加人員 一団体6名～10名
- 3）演技方法 別記要項にあり
- 4）参加者資格 同一団体所属の従業員により編成せる団体とす

（二）女子産業従業員団体

- 1）種目 別記要項にあり
- 2）参加人員 一団体9名～15名
- 3）演技方法 別記要項にあり
- 4）参加者資格 同一団体所属の従業員により編成せる団体とす

（三）一般男子団体

- 1）種目 別記要項にあり

- 2) 参加人員 一団体 6 名～10名
- 3) 演技方法 別記要項にあり
- 4) 参加者資格 学生，教員，生徒，一般男子

四 一般女子団体

- 1) 種目 別記要項にあり
- 2) 参加人員 一団体 6 名～10名
- 3) 演技方法 別記要項にあり
- 4) 参加者資格 専門学校生徒，教員，その他一般の女子

四、審判規定（どういう訳か四になっている，原文のまま）

別記要項にあり

五、参加者選出方法（略）

体操競技要項

一、一般男子個人競技（略）

二、一般女子個人競技（略）

三、教員府県対抗競技

競技種目 鉄棒，跳箱の規定種目と鉄棒，跳箱，徒手の自由種目都合五種目を行う

(一) 鉄棒（高さ 2 米20以上）

振上一前方振出 1/2 転向（片逆手）一蹴上（順手）一巴一中拔下

(二) 跳箱（高さ 1 米以上，縦）

腕立前方転回

演技方法

- 1. 規定種目は自由種目として行うを得ず
- 2. 徒手は団体にて行い時間は 2 分以上 4 分以内，レコード使用の場合は一面とす
- 3. 試技は規定，自由共に一回限りとす
- 4. 順位省略

四、男子中等学校府県対抗競技

五、男子中等学校個人競技

(一) 鉄棒

(二) 跳箱

(三) 徒手（団体のみ）

大日本国民体操（一回伴奏レコード使用）

○自由種目 鉄棒，跳箱

以下略

六、集団体操競技

競技種目 各種別共規定，自由の兩種目を行う

(一) 規定種目

1. 女子中等学校 大日本女子青年体操
2. 男子産業従業員 大日本国民体操
3. 女子産業従業員 大日本国民体操
4. 一般男子 大日本青年体操
5. 一般女子 大日本女子青年体操

(二) 自由種目

各団体に自由選定の一種目を行う

但し女子中等学校団体は行進遊戯を一種目行うものとす

演技方法

- 1) 各団体一組にて号令，音楽，レコードに合せて行う（尚試技の際，自由種目に使用のレコードは持参すること）
- 2) 自由種目演技時間は3分間以内，又レコード使用演技は一面とす，規定は自由種目として行うを得ず
- 3) 試技の際是指揮者付添のこと
- 4) 入退場も審査す
- 5) 試技は一回限りとす

——（以上原文は縦書き）——

戦後昭和24年（1949）に国民体育大会に団体徒手の名称で参加したのは，ま

ず高校生である。特に注目すべきは、高校男子の部で8連勝を遂げた新潟県チーム、加藤信治監督の下に鍛えぬかれた高田高校体操部の面々であった。彼等は、けれんみのない徒手体操、組立運動を間に入れながら、よく揃ったタンプリングをこなし糸乱れぬ演技を披露したのである。

その後の鳥取県智頭農林高校の活躍は現在に至るまで続いており、戦績においてははるかに上回るが、先鞭を付けたという意味で高田高校が評価されてよいであろう。

団体徒手のチームは6人で構成されるので、人数の点では異なるが、複数のアクロ体操と団体徒手はあまり変わらないものに思える。尤も、ルール上徒手体操部分が演技の70%程度含む必要がある点は大きな違いといえるかもしれない。

5. トランポリン

もともと、綱渡りや空中ブランコのような空中曲芸に用いた救命用安全ネットにヒントを得て、1936年アメリカのジョージ・ニッセン (George Nissen) によって、今日のようなスポーツとして開発された。このトランポリン運動は、それ自体競技できるだけでなく、宙返り系運動の練習に大きく貢献した。トランポリン特有の上昇力を利用して、宙返りの多重回転、多重ひねりが飛躍的に進歩した。わが国には、ニッセンらによって、昭和34年(1959)に紹介され盛んに練習されるようになった。以来わが国でも選手権大会が開かれるようになり、一般体操の部、続いて新体操の分野で競技されていた。昭和39年(1964)には全日本特殊種目選手権大会で男女ともトランポリンの競技があり、48年(1973)まで男女が新体操のなかで選手権を争っていたものである。しかし、49年から新体操の競技から姿を消してしまった。

トランポリン運動は、アクロ体操の宙返り技の基礎練習には最適の器具であるばかりでなく、アクロ体操の3人組や4人組は、人を使ったトランポリン運動そのものといえるほど技が酷似している。この器械と運動の開発者であるジョージ・ニッセンは現在国際アクロ体操連盟の常任理事でもある。

要約と展望

日本の体操（器械体操および徒手体操）は欧米から移入され、軍と学校に根をおろしたが、スポーツとしての体操競技は、まず器械体操という形をとって学生の手で発展をみた。他方、学校体操や後のラジオ体操を通して普及した集団体操は、戦後団体徒手として発展し、男子においてはアクロ体操との共通点を多く見出すことができる。しかし、女子の団体徒手については、藤村学園が早くから手掛けていたものが示すように、現在の新体操の方向を指向していたと思われる。女子の新体操はアクロ体操とは若干ニュアンスが違うので、あえてここに取り上げなかった。しかし、女子においても戦前から器械体操の競技に参加して来ているし、トランポリンにも出場しているし、マットの競技も行った経験を持っているのである。

このように、先駆者たちの努力によって、各種の体操の土壌はふくよかに耕され、根を張り成長を遂げつつある中でアクロ体操も各所でその芽生えをみる事が出来るのである。しかし、わが国の体操は、学校体操として発展してきた関係から、保健体育的な絡まりから逃れられない立場にある。日本体操協会の中に体操競技と新体操が同居していることもその一つである。新体操は最近になってその性格を変え手具体操としての特徴を顕著に示すようになったが、その前身である集団体操や一般体操の原点は元来美容や健康づくりを目指した所謂カリセニックスである。体操競技はこれに対して、技を追及するひとつのスポーツであり、その点ではアクロバットの部類に属するものである。結局、集団体操がカリセニックスに甘んずることが出来ず競技性を手具扱い（と身体の美的表現は勿論のこと）に見出したものは「わざ」に対する挑戦ではなかろうか。

アクロ体操は、まさにこの「わざ」（スタンツ⁽¹⁾）への挑戦であり、その意味

(1) 石田保之「スタンツ第1部 回転運動の指導」昭和47年、10～14頁

（「スタンツの概念」のなかで、スタンツとカリセニックスの違いについて詳しく論じられている）

では非常に純粋なものといえよう。ただ、従来「アクロバット」という語が、中世以来の「軽業」という語が示すように、その社会的背景を担って若干侮蔑的な意味合いを含んでいることは否めない。残念ながら、このようなこともアクロ体操の将来性を展望するにあたって考慮に入れなければならない。

しかしながら、アクロ体操が競技されるようになり、その純粋さが社会に素直に受け入れられることによって、アクロバットに対するイメージが逆に塗り変えられることが現代では重要なのではなかろうか。

なお、資料不足による不十分な箇所が多かったので、現存する資料の収集や発掘が急務であると感じられた。これらについては今後の研究課題としたい。

その他の参考文献

洪江保「簡易体操法」明治25年

大日本体育会編「瑞典式体操」明治35年

大谷武一「ブック来る一体育と競技10—9」昭和6年

玉川学園「玉川教育」昭和38年

小原国芳監修「玉川百科大辞典29」昭和40年

森園澄子「団体系の考察」東京女子体育大学紀要 第一号 昭和41年

下津谷俊夫「現代哲学的体育学」昭和44年

佐藤たけ「新体操 I・H. に関する一考察」東京女子体育大学紀要 第4号 昭和44年

森梯次郎「ニルス・ブック基本体操と其批判」東京女子体育大学紀要 第5号 昭和45年

佐藤たけ「新体操競技（個人種目）に関する一考察」

東京女子体育大学紀要 第9号 昭和49年

金子明友「体操競技のコーチング」昭和60年

日本体育協会監修「現代スポーツ百科事典」昭和45年

今村嘉雄他編「新修体育大辞典」昭和54年